論　文

M. アーノルドのイスラム論とジハード，及び日本統治機構の特質と矛盾Ⅲ

渡辺栄太郎（大東文化大学名誉教授）

M.Arnold's Islam Treatise and Jihād, and the Characteristics and Contradictions of Japan's Sovereign Structure III

Eitaro WATANABE

1

中東諸国や北アフリカ地域から，紛争を逃れて主にヨーロッパに移住しようとする避難民・移民で，世界は現在大きな問題になっている。その震源地は大体イスラム圏に属するように見える。そこでアーノルドにもイスラム関係論があるので，今回はこれを取り上げることにした。本論の後半第３節は前論に引き続き日本統治体制の考察である。本来双方とも簡単に結論できる問題ではないが，ここで一応の方向性は出しておきたいと思う。アーノルド論説の資料はミシガン大学の散文全集であり，これを翻訳して再度要約し，重点を生かしてスペースを大幅に調整した。前半後半とも，内容は文明と神性に関わるものである。

※　※

“Persian Passion Play”『ペルシァの情熱劇』

Every body has this last autumn been either seeing the Ammergau Passion Play or hearing about it; and to find any one who has seeing it and not been deeply interested and moved by it, is very rare.[1]

「誰もが今秋アマルガウ情熱劇を見たか，その話を聞くとかしてきたことであろうが，それを見て深く印象付けられず感激しなかった人を見つけるのはとても稀なことである。」

この論説は以上の書き出しで始まる。現在，イスラム過激派が破壊行為で大きな問題を引き起こしている事情は，世界の多くの人びとの懸念と関心を呼んでいる事であろう。キリスト教テロとか仏教テロという言葉は聞いたことがないし，ヒンドゥー教その他の宗教でも，そのような恐ろしい話は殆ど耳にした事はない。ここでは先ず，アーノルドの論を３つに分けて検討してみたい。

(1)　当地アマルガウで農夫や旅行者が多く集まる中に，カトリックの神父，英国教会やプロテスタントの牧師たちも目立って参集していた。会場では共に同情と好意に満ちた雰囲気に染まって

いた。最近一僧職人がこのアマルガウでの演劇について書いた記事が新聞に報じられたのに，或忠告者が劇を見て感動するより，信仰によって学ぶよう人に教えるのが僧識者の責務だと批判したという。それで私（アーノルド）が伝えようとするのは，多くの観衆や俳優たちがいかに真面目で熱気にあふれていても，Bavariaというキリスト教団の不在な遠隔地で起きたこの東方の産物（this product of the remote East）を，アマルガウで見た記憶として提示したいと思う。

ゴビノ伯爵（count Gobineau）は，テヘランとアテネでフランス公使を勤め，数年前に中央アジアの宗教と哲学の現状について著作を出版した。彼は民族学（ethnology）の研究でも知られ，ペルシァの宗教改革者Mirza Ali Mohammedの開いたバーブ教（Bâbism）について言及している。これは元来ペルシァの古い国民宗教で，今にいうイスラム（Mohametism）と混合を果たしたものである。Aliは自分の拠点Tablisで1849年に騒乱を引き起こしたとして死刑に処された。だが彼もメッカへは巡礼していた。

所でイスラムの開祖マホメット（ムハンマド）には，Aliと呼ばれる最良の従者が居た。彼は司教代理（vicar）と宣せられる首長であった。Fatimaと結婚し，息子たちHassanとHusseinはマホメットの後継ぎと考えられていた。Aliの死後，最初のCaliph（後継者）として回教教主トルコ王（Sultanは称号廃止）にAbu-Bekrが座につく。ベクルの死後Othmanが暗殺され，その間マホメットの軍隊はペルシァ，シリア，エジプトを 征服したが，シリア総督Moawiyahはアリの軍隊とメソポタミアで血生ぐさい戦闘を交えた。複雑な後継争いを経てShiahs（シーア）とSunis（スンニ）に分離し，シーア派は最初の3人のカリフを権力のさん奪者として反対し，一方でAliをマホメットの最初の後継者とするスンニ派は，Abu Bekr, OmarとOthmanを認めてシーア派を不敬な異端者とみなす。ペルシァ人たちはシーア派で，アラビア人はトルコ人と共にスンニ派に属する。

Hegira（回教紀元）はマホメットがメッカからメジナへ逃避した4年後を始まりとする。Kufaはアリが暗殺されたユーフラテス下流の都市であるが，彼の息子の一人Husseinは女小供を連れてアラビアの砂漠を渡り，Kerbelaでクーファ総督オベイダラの五千騎の軍隊に囲まれた。フセインは妹Fatimaの嘆きを抑え，「我らの信頼は神のみにあって，総てのムスリムは神の意に従うのだ」と言って片手に剣を，一方の手にコーランをかざして一団を率い，群がる敵に突入して戦死する。これで争いは終結した。Gibbonは，フセインの苦難の殉死が今でも墓への巡礼と，ペルシァの信者の悲しみや憤激という宗教的熱狂を引き起こしているのだと語っている。

所で現世紀，Kerbelaの悲劇を種にペルシァの国家的演劇が立ち上った。ゴビノ伯はこれを見聞して，偉大で深刻な事件としてギリシァ演劇に比すべきものと評価している。勿論アマルガウの情熱劇も対等の価値が認められるものとして，これらは*tazyas*と称される。

先ずMoharram（イスラム暦−月）の10日間，カーベラの殉教記念として，旧約聖書の場面が演じられる。JosephとJacobに続いて天使Gabrielが舞台に現われ，信仰の不足を咎(とが)められる話である。夜に*tazyas*が続いてない時行列が通り，男たちは胸を叩きながら「おおHassan, Hussein」と叫ぶ。その巡礼の間に殉教者の墓地では説教が実施され，Kerbelaの伝説が大衆に拡充されて聖歌により興奮は一そう熱狂化する。高く旗を掲げ，松明(たいまつ)を灯して行列は続く。男たちはシャツを切

り裂き，殉教者を称えて祈祷聖歌に合わせ，右手で左肩を打ちながら行進する。彼らは *Seyids* が説教する劇場に向かい，踊りながらカスタネットを鳴らし，傍観者の歌う葬送歌に合わせて Imams の名が呼び返される。Berbers は上半身裸でタンバリンとシンバルを打ち鳴らし，以前 Imams をあざけったと言われていることで腕や頬を鎖や針で打ち，音楽が止むまでこれを続ける。殉死した Imams，イスラムもキリスト教も超えて，アドニス（ギリシァ神話の女神）やビーナスに愛された少年への祈祷が催される。その *Takyas* の祝賀のために劇場には人が増え，人々は貢物を捧げ，装飾を施した箱を供える宗教行事を行う。

ゴビノ伯は時にその代表的演劇について描写している。舞台の装置，備品，俳優たちの服装から真剣な演技をする人たち，皆が一体となって，*Yezid*（権力奪取のカリフ），Ibn, Said（よこしまな将軍），Shumar（副官）による Imams への残酷な仕打ち，イマムの女たちの泣き叫びなどで観衆の胸を打ち，腕を天に向けてうめき，祈りを唱えて自己忘却を誘う。演技は男たちのみで，天使と女性は少年が演ずる。ドラマに作者の名はないが，大衆に理解されるよう想像と情緒の圧力を生かして工夫されている。Imams とその家族たちは韻文的聖歌で語られ，迫害者や悪党たちは散文で語る。舞台は音楽指揮者の指示下にあり，彼は聖なる人物として注釈や演説も担当し，殉教への観衆の同情と落涙を促す。そこにはいかなる隠ぺいも疑問の余地もなく，演技者や小供たちをも感動に導いて行く。

劇場は聴衆で満ち，高位者・王の小姓・軍の将校・高官たちが背に水入りの皮袋を掛けて群衆に水を分け与え，Kerbela の砂漠で Imams が苦しんだ渇きを呼びさます。野性的聖歌や連祷が催され，回教托鉢僧（dervish），兵士，群衆の奉仕人によって雰囲気は高揭され，時に激発する。突然止められては演説者が *sakou* 上に登り，ムスリムの幸せを語って楽園への手引きをする。それを多くの預言者たちが歓迎し，天使が報せをもたらしてコーランを読むように勧める，「フセイン，フセインと呼びなさい」と。群衆は両腕を上げ「*Ya Allah !* おお神よ！」と叫ぶ。ドラムとトランペットが演奏されて *Cazya* の始まりを告げる。先ず Imams の小供時代のドラマ，"*The Children Digging*" という作品が演じられる。Ali の妻 Fatima と 2 人の子 Hassan と Hussein の話で，そこに Gabriel が加わる。2 人の子が地面に穴を掘って遊ぶうち，気性の激しい少年たちに襲われ虐待を受ける。これが将来のカーベラでの殺人を象徴する予告であるとする。聴衆は身震いし，襲撃者たちは勝ち誇って立ち去る所で終わる。

※マホメット（現称ムハンマド）のイスラム創設以来，後継者争いを巡って，シーア派とスンニ派に分離した事情が述べられている。ペルシァ（大体現イランに相当）ではアリの息子フセインが立ち，彼はアラブ軍（スンニ派）に囲まれて戦死した。フセインは剣とコーランを手にして，神を信じ敵軍に突入したカーベラの悲劇である。'*Tazyas*' 劇に先立って催される行進で，男たちが自分の胸を打ったり，肩を叩いたりする映像は 10 数年前に筆者はテレビで見た記憶がある。その時は「そんな事をする国もあるんだ」という感懐しかなかったが，これは現代でも行われている行事だと容易に推測される。イスラム寺院のモスクでは，一日 5 回の礼拝習慣があることとも関連して想起される。ハッサンとフセインの小供時代の遊びでの予言・予徴の話題など，この時代迷信的なも

のへの信奉もまだ力を有していたことだろう。シーア派内の催しのことではあるが，そこではやはり，イスラム世界の雰囲気をよく伝えているとは言えようか。

(2) 続けて殉教と Kerbela の話に戻る。当時代の有名な作品に '*Marriage of Kassem*' がある。カセムはフセインの兄 Imam Hassan の息子で，ハッサンはメディナで邪悪なカリフ Yezid に毒殺されていた。当劇にはペルシァの王女，ササン朝君主の子，フセインの姉妹，甥（おい）の Abdellah，美しい娘 Zobeyda，それにモハメットの孫娘などの役が当場する。Tent（フセイン一族）の家族が砂漠でシリア軍に囲まれ，渇きに水を求めて川に至ろうとする間に，次つぎに殺害・毒殺される仲間もいるという厳しい状況下，16 歳のカセムの結婚が取り行われる話である。

Imam Hussein が王座に居て，家族全員で Ali-Akber の横たえられた死体を見守っている。Kassem は神と家の創始者に向けて独り言をいう。「汝自身をハーレムの女性たちから離別しなさい。汝自身が程なく矢と槍で突かれたフセインの体を見る事だろう」と。Kassem は自分にも戦わせて欲しいと願い出るが，王フセインは彼を大事に思って拒絶した。カセムは言う。「私を程なく土で覆わせよ。汝らの眼を天のユーフラテスの水に向けよ！私は渇きで死ぬ。神よ許し給え。」王フセインの拒絶に不満の気持ちでいると，黒衣の母 Omm-Leyla が出て，「汝の死の運命は手に持つ書き物に予示されている。父ハッサンの遺言で，カセムは Zobeyda と結婚すべきだと述べられている」と。カセムは驚きながら，それが預言者の命令で神の意志だろうと信じて同意する。イマム（フセイン）は厳しゅくに答える，「このカーベラの苦難の中で，墓は結婚の寝床となり，死に装束は花嫁の衣裳となろう。すべて聖なる主（Head）の意向に従うものである」。

突然ここにシリアの軍隊が現われる。先頭に Ibn-Said と副官 Shemar が居た。「信仰の王子が砂漠で結婚を祝う。祝祭を嘆きに変えてやろう」と彼らはあざけり叫ぶ。カセムは花嫁を抱き，「私は汝を見捨てなければならない」と。妻は古代東洋の儀式に従って夫の周囲を巡り，彼の衣をしっかりと握る。夫は「手を離せ，我らは我らのものではないのだ」。カセムは小さな自分の兄弟の面倒をフセインに委ねる。Tent 一族は頭上にコーランを掲げて祈る。カセムは戦ってシリア軍の隊長を殺して戻ってきたが，そのほうびに水を求める。「もし口をしめらせてもらえば，Kufa の兄たちに最後をみとらせましょう」と。父フセインは唇をカセムの口に押しつけた。カセムは元気を得て突進し，投げ槍に打たれて天幕の中のイマムの足下で死んだ。これでカセムの結婚は終りを告げる。しかし大いなる日は回教暦の 1 月 10 日で，Imam の死が訪れる。ギボンの物語に依ると，戦闘はフセイン（イマム）の仲間の最後で終息するが，フセインは投げ槍で口を貫かれ，一人疲れ果てて天幕の入口で腰を下している。血に染まった両手を挙げて葬儀の祈りを口にした。絶望のこうこつの中，妹が天幕から抜け出して Kufians（Kufa，チグリス川に沿う古代の町）軍の将軍にフセインを殺さないよう懇願した。しかし副官シャメールはこのマホメットの孫を長槍と剣で殺害し，死体を Kufa 城の残忍な総督の下へともたらした。

この大災難に *tazya* の誰一人として満足はしない。演技者の熱心さにうたれ，見物客は場外にあふれていた。更に異常な効果を生むのは '*The Christian Damsel*'（キリスト教の乙女）の存在である。大虐殺（the carnage）を終えて敵は去って行く。見物者に場面が Kerbela の原野であることを示し，

周囲すべてがろうそくの灯に照らされて栄光を象徴する。*sakou* の一端には Imam Hussein の墓が見える。そこにキャラバン一行が入場し，Jesus Christ が現われて，隊商の一女性にここが Kerbela だと伝え，物語を語って聞かせる。その間にもアラブ人やベドウイン人が入ってきて *sakou* の上で略奪をする。聴衆の恐怖は最高潮となり，悪漢の襲来と共に白い鳩たちが舞い上がる。ここでフセインの声が墓から呼びかける。*'There is no God but God'*「神の外に神なし」。強盗たちは恐れて跳び去る。天使，預言者たち，*Mohamet*，キリスト，モーゼ（Moses），the Imams（イマム一家），聖女たち，これらが皆 *sakou* 上に集ってフセインの名誉を称える。キリスト教の乙女たちは目覚め，Shiahs（シーア派）の Islam を抱く。

以上の物語とは別に，イマム一族の捕われた女・子供たちの事で，カリフ Yezid の裁判所の場面が演じられる。しかし Kerbela での捕虜たちへの残酷な扱いのため，観衆は好意を以ては見ない。実はカリフの妻は以前マホメットの娘 Fatima の奴隷であった上，ファティマ自身フセインと Zeyneb の母である。そこでカリフの妻はこの女・小供たちを助けようとするが，残忍なカリフ Yezid は妻にさえ死を与えようとする。その場にフセインの霊が現れて，彼女には幸せの幻覚が訪れる。ファティマの母と叔母が彼女を埋葬する所で，終幕を迎える。

※まず第一に水の乏しい砂漠に育った文明だと感じさせられる。「カセムの結婚」から，当地では既にハーレムという制度が存在していた事が判る。預言とか神の意志とかで，現代では迷信としか思われないことを信心している。「キリスト教の乙女」が加わって，モーゼからキリスト，次にマホメットに至るセム・ハム一神教の流れの中で，キリスト教よりイスラムの優越を主張しているようにも見える。とにかく「神の外に神なし」という言葉が示すように，神への絶対的信仰，強固な神の支配と影響力を信奉する文化であると言える。最後の部分では話の筋を生かし，使用されている代名詞が誰を指すのか，確定して解釈するのに苦心した。

(3)　以上が Kerbela の殉教で，聴衆に大きな同情と苦悩を呼び覚ました劇である。これこそペルシァの情熱劇であって，ペルシァ人がセム族アラビア人に支配され，フセインの殉教を印象づけて愛国感情を刺激している。Ali や Imam がペルシァ国を代表して侵略・略奪され，フセインが侮辱されて，アラビア・トルコ・アフガニスタン人が残忍なカリフ Yezid を合法的存在と見なす事で遺伝的敵（hereditary enemies）と認識している。これがドラマの形を取ったと，ゴビノ伯は述べている。シーア派とスンニ派の分裂は宗教信仰の相違というより，人種の分割に真因があると伯は言う。

マホメットの従弟（いとこ）Jaffer は最初の信者たちと共にメッカの偶像崇拝者に迫害され AD655 年 Abyssinia へ逃れた。当地はキリスト教国で，ジャファーたちはよこしまを避け，神がもたらした教義を守っていると伝えて，偶像崇拝（idolatry）を強要するメッカの追手に対し，アビシニアの王は引き渡しを拒絶したと言う。ここで本論の作者アーノルドは，この事実が正確でなくても，緊急な必要での本質的交流では，宗教が異っても人間性には多くの共通点が見られると語る。但しそれは，その宗教が多くの人に有益だと認識されてこその価値である。その意味では聖書がコーランより良い宗教だと考える必要もない，という。

The Bible *grew*, the Koran *was made*; there lies the immense difference in depth and truth between them! (2)

「聖書は育ツタ，コーランは作ラレタ。それらの間には深みと真実に於て広大な相違が存在する！」

その弱み自体がコーランを，知的成長の低い段階でも或目的にとって，また人びとにとって聖書より強力な道具となった，と指摘する。その源泉からコーランは激しく教育的性質を有し，未来に復讐と刑罰を断続的に主張（perpetual insistence）し，楽園と地獄を見せしめとして持つ。聖書が有しない形である。広いアフリカでの未進歩の世界では，これで大きく成功したと言われる。正義の神（the righteous Eternal）は，邪（よこしま）な者に平和がなく，正義は永遠の基礎であるという教義で旧訳聖書が権威を有するのに対し，コーランではこの教義に遙かに遅れていると，アーノルドは考える。マホメットは疑いなくユダヤ（Jews）と彼らの文書を知っていたし，その源泉から何物かを得ていた。しかしそれは単なる盗用ではなく，真剣さと高尚さを持ち，セム族の道義エネルギーの中で偶像崇拝を嫌悪し，正義（justice）の価値をコーランの中に作り，マホメット独自の仕方で正義の教師となった。だが正義について旧訳聖書の理念が清新さを失い，硬直化したのに従い，キリスト教がユダヤ教の水域に優しさと内省，自己放棄（inwardness, mildness, and self-renouncement）の精神をもたらしたのである。だがマホメットにはこうした革新はなかった。正義の概念で始まったが，狭量で，古いユダヤ的な（old Jewish）精神に留（とど）まった。進展しては狭い基礎の誤ちから闘争的になり，人好きのしない宗教となった。世間に向けての闘争で成功の喜びは覚付かない。ギボンは言う，彼らが華美を軽蔑して神に人間の不正を具申し，ハッサンとフセインの力を一般の想像以上に練り上げたが，人びとは彼らを愛し，マホメットの神を尊んで空虚さを満たすものとしたと。アリやフセインの献身的な優しさを大衆の心に沁み込ませ，想像力を深めて自己犠牲の理想に引き上げた，という事である。キリスト教では，温和さと心優しい合理性（mildness and sweet reasonableness）があり，これが自己犠牲となって人間社会に偉大で力強い有益さをもたらす原理を成している。イスラムの宗教では，Kerbela の受難者たちの姿を通じて，何百万もの人びとの眼に高く賞揚される教訓を訴えているのである。アーノルドは最後にマホメットの言葉を添えて，この論を締め括（くく）っている。

"Learn of me, that I am *mild*, and *lowly of heart*; and ye shall find *rest unto your souls*." (3)

『私に学べ，私が温和で謙譲であることを，そうすれば汝らは魂ニ休息ヲ見出すであろう。』

※昨 2015 年の 11 月 13 日，パリで IS に依る大規模な同時多発テロ事件が起きた。イスラム過激派組織の起こしたことであるが，2001 年 9 月 11 日のニューヨーク事件に引き続き，幾つものテロが方々で繰り返されている。かつてはバーミヤン石仏破壊の例にも見るように，偶像崇拝を極度に忌み嫌い，他宗教・他文明に対して攻撃的性格をイスラムが有するという印象は拭えない。これまでのアーノルドの論述からも，その特質の一端が示唆されているようにも思える。それで次章では簡潔かつ客観的に，できるだけ本質を突いたイスラム論を検討しておきたいと思う。

アーノルドは 1871 年の 10 月 16 日夕，バーミンガム・ミッドランド協会の後援で，Masonic

Hall で無料の講演を実施した。700 人程の聴衆があり，1 時間 20 分を要したという。他にこれを Leamington でも講演し，*Cornhill Magazine* に掲載された。この論題に関しては，彼の友人でフランスの当時有名な評論家 Ernest Renan との交流が知られている。(4)

2

街の書店で見た本に，一神教は危険だという主張を掲げたものがあった。私はこれを目にして，多少不用意で安易な見解ではないかなと思った。例えばイエス・キリストは確かにセム・ハム一神教の系統に属するが，キリスト教に永い間宗派の争いや改革のための戦いはあったが，世の人々に直接危害を加える宗教ではなかったと思う。仏教でも恐らく同じ事が言えるだろう。そこで世界で第二位の信者数を擁するイスラム（教）について，平和の宗教だと言いながら，どうしてテロが発生するのか，どこかに宗教としての盲点はないのか，この点に絞って重点的に考察してみたい。

イスラ(ー)ムは，西暦 7 世紀アラビア半島でムハンマドに依って創始された。日本では聖徳太子の時代である。回教とは中国由来で，マホメットとコーランとは西洋経典に基づく呼称である。イスラムという言葉は帰依するという意味で，信徒はムスリム（帰依者）と呼ばれる。要は「唯一至高のアッラーに絶対帰依し，その教えに従って生きること」を宗とする。イスラムは狭義の宗教の範囲を越えて，社会の多方面に守るべき規則を定めている所に，宗教としての特質がある，と言われる。

(1) イスラムの誕生と初期の沿革

ムハンマドはマッカ（メッカ）を支配するクライシュ族の支族ハーシムの子孫として，西暦 570 年頃出生したと確定されている。父は誕生前に，母アーミナは 6 歳の時に他界した。当時もアラビア半島の殆どは砂漠に覆われ，狭い海岸地帯と西の山岳地域にのみ幾分柔和な自然環境があった。住民は大半遊牧民で，社会の土台は氏族にあり，これが集って部族を形成していた。財産は家畜と僅かな物品のみで，掠奪しては動物や物資，それに女を奴隷として身近に置いた。絶えず自然におののき，他部族におびえる境遇にあって，実務的で勇気ある者が指導者の地位を占めていた。他には詩人が尊ばれ，その雄弁さには超能力が備っていると考えられた。その厳しいアラビア半島の環境の中にも，既にユダヤ教とキリスト教が入っていたが，初期のアラビア人には特定の神々や女神を崇拝する種族もあり，中でも総ての者から信仰を集めた神が一柱，それが世界の創造主アッラーの存在であった。当時，半島西部・中央部の諸部族にとってメッカは宗教的に重要な地位を占め，三柱の女神に奉げられた神殿がカーバと呼ばれて，他の神々の偶像も安置されていた。住民はカーバを訪れ，神殿に巡礼する儀礼を行っていた。その上メッカは商業の中心地でもあり，クライシュ族その他のキャラバンの中継地として栄えていたのである。

ムハンマドは少年時代に羊飼いをしていたが，のちハディージャという裕福な女商人に雇われ，彼女と結婚した。25 歳の時で，ハディージャは再々婚で 40 歳だったという。当地では多妻の習慣

があったが，彼女との間に子が6人，その後にもう1人ができた。

（啓示） ムハンマドは40歳の頃，孤独な瞑想にふける事が多かった。時どきメッカ郊外の山の洞窟で幾夜も過ごし，イスラムの伝承によると，或日天使が人間の姿で現われ，この短い文句を読誦せよと命じた。それを読んで洞窟を出ようとすると後ろから声がかかった，「ムハンマドよ，あなたは神の使徒です。私はガブリエルである」と。のち何度も同じ経験が繰り返されて恐怖に動転したムハンマドは，妻にこの事実を打ち明けた。ハディージャはそれは神からの言葉に違いないと信じて語り，程なく彼は自分が使徒として仕えることが，神の意志に沿うことだと確信した。

613年頃，ムハンマドはアブラハムやモーゼ，イエスの足跡を辿り，神の言葉を人類にもたらす事が自分の天命だと悟った。この唯一絶対の神アッラーの信仰は，メッカの支配層の権力と富の基盤に挑戦することになり，彼らから暴力や脅迫を受けた。619年には彼は近隣のターイフに避難したが，当年愛妻ハディージャと庇護者の叔父アブー・ターリフが他界している。しかしイスラム伝承では，この年彼がカーバ付近で眠っている時，天使ガブリエルに起こされ，導かれてエルサレムに旅し，岩の上から昇天してアブラハム，イエス，モーゼに会ったとされている。だが程なくメッカ人の一団が彼の暗殺を企んでいるという報せが届いて，622年9月，親しい補佐役アブー・バクルと共に3日間洞窟に隠れ，メディナの町に移動した。当地でメディナの住民とメッカから彼を求めてやって来た人々とで，初めてイスラム共同体社会（ウンマ）を作った。だがメディナでもユダヤ教徒との間に争いが起き，またメッカからムハンマドを求めて来た人たちに古い習慣の掠奪を許したことで，隊商を組織していたメディナの商人を激怒させ，612年から3年間断続してメッカの派遣軍と戦闘があった。やがて彼はメッカ支配者の打倒を目指すようになる。通常ムハンマドが共同体に定住している時には，政治指導者，調停者，裁判官，立法官の役目を担い，社会の制度化に努めたと言われる。メッカに侵攻平定して彼はカーバ神殿に赴き，「アッラーフ・アクバル」（神は偉大）と宣言した。その後2年を経てムハンマドはイスラム社会を宣伝し，アラビア半島の大半を支配下に収めた。632年彼はイスラム教徒しかカーバでの礼拝は許されないと規則に定めた。そうして最近神から授かった言葉という天啓を大衆に説いた。この巡礼を最後にムハンマドはメディナへ帰り，間もなく病に倒れて永眠した。

(2) 経典と教義

カオルーン（コーラン）は，イスラム教徒が神の言葉だと信じているもので，ムハンマドに生涯を通じて啓示され弟子たちがそれを書き留め，彼の死後に書物としてまとめられた。これがイスラムの礎となっている。イスラム教徒は子供に幼い時からコーランを学ばせ，暗記暗唱させ，書写によって読み書きを覚えさせるという。神はムハンマドにアラビア語でカオルーンを啓示し，神の言葉として完璧で永遠不易なものとされる。章は「スーラ」と呼ばれ，114章から成る。カオルーンには，神がモーゼらユダヤの預言者に律法（旧訳聖書）をもたらし，キリストに新訳聖書を授け，ムハンマドにはカオルーンを与えたと記される。その上コーランは最後の天啓であって，以前の啓示には間違いや誤った考えがあり，それで堕落した人間に警告し，唯一絶対の神として真の宗教を

取り戻すものとされた。神は「天と地を創り，雲から水を送られた」（カオルーン 14，32），慈悲深く慈愛に満ち，罪の邪悪を戒め，救いの道神を崇拝する方法を教える。天国は湧き流れる泉のある庭園で，救われた人たちは美しい若者に囲まれ，至上の飲食物を楽しめるという。神は精霊から天使を創って自らの使者とした。天使の下には火からジンが作られて存在する（イスラム以前に岩石や樹木に棲むとされていたもの）。またイスラムの伝承にはイブリースという悪魔が居たが，それは神が地上に創った人間のうち，神の命に背いた者である。こうして相続や結婚での規則が定められた。カオルーンの研究や解説には 9，10 世紀に諸学者によって探求され，以来ムハンマドは，神に最も近い存在であると考えられている。

ハディース　ムハンマドの人生はイスラム教徒の崇敬の対象となった。思いやりがあり，聡明正直な人物で政治的手腕に恵まれていた。軍事指導者としては信者を率いてアラビア半島の支配権も得た。彼は教徒から模範的人間で見習うべき手本とされた。存命中から弟子たちによって説教や生活記録が収集されて，「ハディース」（伝承）と呼ばれ，イスラム共同体に流布された。イスラム帝国はアラビア半島の境界を超え，征服した地域での新改宗者たちは彼の説教を熱心に知りたがった。没後には共同体員によって種々創作されたが，真のハディースを見つけるため，多くの学者が膨大な記録を検討し，6 点のハディースに正当さが承認されている。

シャリーア（神の掟，イスラム法）　初期共同体の学者は，カオルーンとハディースから「シャリーア」を発展させた。教徒の社会への神の意図であって，行動規範として規則，義務，礼拝，儀礼が含まれる。8 世紀から 10 世紀にかけて，法典を編む必要から出来たものである。学者たちの意見の相違から法派が生まれ，スンニ派，シーア派の間には，交流がなかったと言われる。「イスラム法」は「近代法」に優先される。

［参考事項］A.　クルアーンには，自然を宗教的象徴として用いた章句が多い。

沈みゆく星に誓って，
汝らの友（ムハンマド）には迷妄も錯誤もない。
己の欲望で語っているのでもない。
それは，下された啓示にほかならない。

イスラムの根本原理２つ　1.「アッラーのほかに神なし」　2.「ムハンマドは神の使徒なり」アッラーは，ヘブライ語での「ヤハウエ」と同一。

ムスリムの宗教的義務行為５つ　1. 信仰告白　2. 礼拝（1 日 5 回）　3. ザカー（定めの喜捨）　4. ラマダン月の断食　5. 巡礼

六信　ムスリムが実在を信じなければならない 6 項目。神，天使，啓典，使徒，来世，定命。――*cf.*『イスラームとは何か』小杉泰（講談社）

［参考事項］B.「クルアーン」の中で，自らが先行する経典よりも優れている事が繰り返し述べられている。それまでに存在した諸宗教にとっては決して受け入れられないものである。――*cf.*『聖典「クルアーン」の思想』大川玲子（講談社）

(3) 伝播とイスラム世界の現代

初期のイスラム　ムハンマドの死後，アブー・バクルを指導者カリフに選ぶ。当時中東は西方をビザンチン帝国，東方はササン朝ペルシァが統治して対峙していた。バクルは西方シリア・イラク方面へ軍を攻撃に指し向けたが，戦闘の始まる634年に死亡した。三代めはウマル・ハッターブが継ぎ，エジプトに転進してビザンチン軍を破り，ササン朝ペルシァとも戦って，イラク・イランを手中に収めた。644年ウマルは他界，ウスマーン・アッファンが新カリフに選ばれた。領土を西へエジプトから北アフリカに拡大，イランではササン朝ペルシァを破ったが，やがてイスラム共同体内部の争いで656年，ウスマーンは暗殺された。後継にアリー・ターリブが立ったが，662年に反対するハーリシー派に刺殺される。この内紛の中でムアーウィヤー族がのし上り，強力な軍隊を擁し自らカリフを名のって，首都をメディナからダマスカスに移した。ウマイヤ家は中東と北アフリカを支配する強力な帝国となった。だが国内には敵対する2派が有り，ハーリジー派，それとアリー・ターリブ（後のシーア派）に従う人びとである。アリーの死後，シーア派の忠節はハサンの弟フセインに移った。彼はムアーウィア死去の知らせでクーファに出向き，ウマイア家に立ち向かおうとした。ウマイア朝カリフのヤジードは少人数のフセイン一行を迎え打ち，これを破った。そこにはムハンマドの孫も居たが，フセインは斬首され，ダマスカスのカリフ，ヤジードに口汚くののしられた。この時以来シーア派の人々は毎年イスラム暦一月に，特別の儀式と礼拝で殉教を追悼する。前章アーノルド "*Persian Passion Play*" の描写がその内実である。

ウマイア王朝は凡そ100年間で，北アフリカから大西洋岸まで，スペイン・フランス南部を侵略，732年フランク王国軍がイスラムを撃退するまで，以後750年間スペインを統治した。パキスタン・アフガニスタンも占領し，財源は占領地からの税収に依った。しかしハーリジー派・シーア派の他，ウマイア家そのものからも反発を受け，アブー・アッバースをカリフとする革命側の手に落ちて，アルマンスールが帝国を統治した。これがアッバース朝で750年から1258年まで続く。モロッコからインドに及ぶ版図を有し，バグダッドに一大中央集権官僚政府を置いて，強力な常備軍と情報網を備えた。ここに文化が繁栄し，数学・医学・神学・哲学がアラビア語に訳され，芸術特に文学では「アラビアン・ナイト」が世に出る。イスラム法制度も確立し，「シャリーア」が作られた。

中世イスラムの繁栄　10世紀中頃までにイスラム帝国は新しい大文明を生む。アラビア語とイスラムの教えは中東，北アフリカ，スペイン，中央アジアに及び，法律・宗教・教育・美術・科学・商業の各分野で黄金期を迎えた。9世紀には衰えを見せ，945年ペルシァ人ブワイフの軍隊がイラクに侵入，バグダッドを占領した。10世紀末，シーア派の一団が北アフリカに小国を建設，エジプトを攻撃して989年に占領，カイロに首都を建設した。ファーティマ朝で，200年間支配が続く。これがアッバース系スンニ派地域と紛争を繰り返しながら，絶頂期にはエジプト・シリアの大半・ペルシァ・アラビア半島・北アフリカの広大な地域を支配し，エジプトは繁栄した。1171年ファーティマ朝は倒壊，サラーフ・アル・ディーン（サラディン）に蹂躙（じゅうりん）され，シーア派のエジプト支配は終わる。

11世紀末，十字軍はエルサレム攻撃に始まり，以後400年に亙り遠征軍が派遣された。1099年

の勝利に依って地中海岸には小王国が建設された。一方，サラディーンはシリア・メソポタミアを統一して国家を建設，1187年十字軍を破ってエルサレムをイスラム支配地とする。しかしイスラム社会は政治・宗教上の対立で小国に分裂していた。13世紀にはモンゴル軍が中国・ロシアの広大な地域を席捲，1250年までにはペルシァもバグダッドも占領され，アッバース朝は滅亡した。

その後イスラム全土を支配する王朝は現れなかった。しかし精神的文化的結束は失われず，15世紀に3帝国が勃興，インドのデリーを都とするムガール帝国，イランにシーア派のサファヴィー朝，14世紀半ばトルコ人国家オスマン帝国が成立して北アフリカ・中東・アナトリア・東南ヨーロッパを支配し，首都ビザンチンのコンスタンティノーブルをイスタンブールと改名した。これらの国はイスラムを内外の国から守る責務を負っていた。イスラム3国は文化的経済的活動で一致し，特に建築でタージ・マハールが世界的に有名となった。オスマン帝国も文化に商業に輝かしい業績を挙げてイスタンブールのモスクなどにその隆盛さを見せている。商業は国境を越えて隊商が盛んに行き交い，船団は大洋を渡ってアジアへと出向いた。この時代宗教学者ウラマー（識者）が活躍したが，国家に批判的な集団もあって，各帝国で不和が国力を蝕み，20世紀初頭には3国とも消滅した。15世紀から18世紀にかけては，イスラムは文明の躍動期にあり，イスラムに改宗した人びとも各地に多く存在していた。

近世イスラムの世界　18世紀イスラム社会は，ムハンマドのイスラム共同体とは異質のものとなり，何億人もの信徒数を持つ世界宗教となった。それまで3つの帝国が社会を支配していたが，20世紀初に最後のオスマン帝国が滅亡し，各地で政治的覇権を目指す闘争が始まって，安定は社会の政治的変動に道を譲った。改革派は聖者崇拝に反対し，イスラムの基本教義，神の唯一絶対性を犯すものと主張した。ウラマーは宗教教育に携わり法規上の判断を下すのが役目であるが，その保守化硬直化が批判された。彼らはイスラムとその社会を正しい道に戻す事で，現行世界の潮流に対抗しようと考えたのである。改革運動は18，9世紀を通じ北アラビアのワッハーブ派を代表とするが，その目的は，イスラム唯一の模範・ムハンマドの共同体に真の生きる道を求めることであった。しかし20世紀初に至って，アラビア半島を征服したのはサウジアラビア国である。インドのイスラム思想家ワリー・ウッラーは，イスラムがヒンドゥー教と混合しているのに気付き，イスラムの浄化と強化を意図し，イスラム復興のためジハード（奮闘）の必要から，擁護の武闘を認めた。1804年にダン・フォディスは信者の軍隊を組織し，西アフリカにソコト国を建設，1905年まで存続した。改革とジハードの精神は18，9世紀に広くイスラム世界に浸透し，リビアのサヌーシ修道会など諸部族の結集と活動に大きな影響を及ぼした。

ヨーロッパ諸国が豊かになり，政治力や軍事力が大きくなると，それらの指導者や商人たちは中東，アジア，アフリカに眼を向け，イギリス・フランス・オランダ・ロシアはこれらの地域に植民地を拡大した。20世紀初頭には，イスラムの諸地域に西洋式の教育・商習慣が持ち込まれ，西欧諸国の利益に供されたのである。それがイスラム世界に従来の制度・習慣への改革を強く促すことになった。即ちイスラム原理の再解釈である。エジプトのアブドゥーとリダーは宗教と政治について，従来のシャリーアから近代法理を作る必要を説いた。英国統治のインドではサイイド・ハーン

が，のちM.イクバールが民主主義と議会制度に強い関心を示した。しかしイスラム知識人，活動家，ウラマーに反対され，発展は阻害された。ここで民族主義者が知的若者の中に抬頭，民主主義・社会主義という西洋思想を採用し，議員制政府と世俗大学制を実現した。殆どの民主主義者は宗教が政治から離れるべきと論じ，強硬に世俗主義を推進したのである。

イスラムの現代　20世紀が進むと，イスラム世界の支配は国家の独立に取って替わられた。ヨーロッパの支配に屈しなかったトルコは，1929年独立共和国を宣言，民主主義指導者アタチュルクは非宗教的国家を目指し，シャリーアを欧風法律に置き換えた。イラク，シリア，エジプト，インドネシアと続き，最後62年にアルジェリアが独立した。1971年にはインドとの内戦後，西のパキスタンと袂（たもと）を分かってパングラデシュも独立。これら新しい独立国は，多くが世俗的権力の軍人層に支配された。そこでイスラム原理シャリーアに戻るべきとする勢力が1928年サン・バナールに依ってエジプトにムスリム同胞団が組織され，強力な政治勢力となった。インドでは1941年にイスラミーの運動が結党された。彼らはイスラムが政治・宗教の他すべてを結合すると主張し，政教分離派の反感をつのらせた。イスラム国家の指導者は政治に宗教を利用しようと考え，エジプトのナセル，後継者のサダトはイスラムの宗教機関を利用し後援した。サダトは国民の意向に関係なく，粗末な経済政策と汚職の蔓延で取り巻き連中だけが豊かになった。イラン国王のシャー，シリアのアサド，またパキスタンでも同じ状況であった。

1967年アラブ諸国とイスラエルの戦争は，イスラム社会の凋落を象徴する出来事となる。エルサレムはイスラエルの手に落ち，政府に対してだけでなく，西欧の風習を取り入れてきた事にも批判が高まり，イスラムの生活様式を大切にする活動が強調された。コーランを読み，礼拝と断食，宗教施設への支援，質素な服装が重視された。イスラムの活動家には，社会の世俗化とイスラム的生活の崩壊に辟易する者も多かった。シリアではイスラム同胞団武闘派が1970年代にアサド派の政府軍と戦い，何千人もの民間人の犠牲を出した。79年のイラン革命では国王シャーの政府を倒したが，政府は米国と緊密過ぎると見られていたのである。革命の声を上げたのはフランスに亡命していたホメイニ師である。79年シャーは権力を追われてしまった。89年のヨルダン，90年のアルジェリアではイスラム系が大きく政治に進出したが，一方で，過激派の活動を不快に思う人びとも，決して少くはない。

時代は替わって2000年代，欧米その他で大規模なテロが起きるようになった。大きなテロは，2001年9月11日のニューヨーク同時多発テロ，続いてイギリスの列車事件，ごく最近のパリで，また当のイスラム系国家でもトルコやジャカルタなど，世界でもあまたにのぼる。イスラム国（IS）やアルカーイダなどがその原因当事者である。多くの理由はあろうが，イスラムが近代化に適応できないのが，大きな原因の一つである事は間違いない。当事国では内戦が続き，数多くの犠牲者・何百万人という難民が生じている。（世界の難民数6000万人台半ばとの報道がある）実際にトルコはEU加盟を果たせていないし，テロ事件は今日，枚挙に暇のない状況である。いやこの論を書いている6月12日，米フロリダ州オーランドで29歳青年の突撃銃乱射で100人以上の死傷者が生じた。米史上最大の銃撃事件で，ISからは賞賛の声明があったという。犯人はアフガン難民の子弟

であるが，背後に何があったにせよ，これは銃規制が出来ていないアメリカ社会の最大欠陥の一つを示していると言えよう。

(4) イスラムの特性

今回の論題に備えて，イスラムに関連する専門著書を，時間をかけて検討してきた。その内容で最もイスラムに特徴的な点について重複しないように心掛け，制約上できるだけ集約して次に記述しておきたい。但し内容の採録ページは，特に必要と思うもの以外は省略する。

[イスラームとは何か]（講談社）

(本著は 2001 年と今回とで 2 度通読した)

イスラームは啓示宗教であり，セム的一神教の系譜に属する。その世界では，唯一神が実在すること，宗教が啓示で始まること，啓示は天使によってもたらされることなどは常識である。その系譜では，「啓示」は神の言葉である。　イスラームの語る神は唯一絶対の存在であり，世界のすべてを創造した。ムハンマドに下った啓示の要点は，唯一の神が実在する。それを示すために送られた徴がクルアーンである。　イスラームの根本原理としての第一原理，「アッラーのほかに神なし」「アッラーの他に何も崇めません。盗みをしません。姦通しません。子女を殺しません」。当時のアラビア半島の社会では男子を尊び，女児が生まれると生き埋めにして殺す習慣があった。　統治は，委任された責務であって，君主が専横すべきものではない。　神の下の平等主義であり「血統を重んじる」原理ではない。　仏教の教義には，仏教が国家を持ち，それが近隣に勢威を示すべきである，との理念はない。キリスト教はその初めからローマ帝国の支配下で，被抑圧者の宗教として呻吟した。従って，正義と力は直接関係ない。　イスラームがキリスト教の場合と違うのは，現実的な力の必要性が宗教理念の中に最初から含み込まれている点にある(政教一元性)。 銀行;イスラームは利子を禁じており，利子の禁止は，不労所得や投資リスクの不公平などを理由に説明される。イスラーム民主主義；西洋の自由民主主義は，価値の相対性を原理としており，神の絶対性を前提とするイスラームと抵触する面がある。(*cf.* 独裁を是認する可能性も含まれる)

[聖典「クルアーン」の思想]（講談社）

「汝に戦いを仕掛ける者に対してはアッラーの道のために戦え，だが度を越してはならない。」(2 章 190 節)　汝らがもし孤児に公平にできそうにないなら，良いと思う女性を二人，三人，または四人，娶りなさい。だが妻に公平にできそうにないなら，一人だけにするか，または右手が所有する者（女奴隷）で我慢しなさい。(4 章 3 節，女性隷属是認)（厳密な意味でクルアーンの翻訳は認められない）　クルアーンの朗唱から，1. 言え，「それはアッラー，唯一なり。2. アッラーは永遠絶対なり」(*cf.*1. ユダヤ教徒はムハンマドが預言で，クルアーンが神の言葉である事を否定し続けた。興味深い点は，イスラームの伝承と聖書の内容と一致させようと工夫している点である。またクルアーンにあるイエスのエピソードは，そこに含められなかった新訳聖書外典と共通している場合がある。*cf.*2. クルアーンは，イエスが十字架に架けられた事に関し，聖書とは異なる見解を示している。彼は十字架では亡くならず，後に天に召されたと解釈されることが多い。)

[イスラーム基本練習帳]（大和書房）

イスラームを信仰する国の多くは，政治と宗教の関係がとても深い。宗教指導者が国の最高権力者だったり，聖典「クルアーン」を憲法とする国がある。　イスラームとは，単なる哲学や思想ではなく，ムスリムは，その教えに基づいた行政を現実社会の中で実現しなければならない。　ムハンマドの時代を理想とし，それを踏襲する理想のイスラム国家の建設が，常に宗教的目標の一つとなっている。　トルコは憲法で政教分離が定められており，政治と宗教は完全に切り離されている。イスラーム誕生以前にも一夫多妻が普通に行われていたし，日本や世界の歴史に目を通せば，権力者や富裕層が複数の妻を持つ事は100年程前まで一般的なことであった。（*cf.* 近代でも明治天皇は3，4人の后（きさき）を有していた）　**ジハード**（jihād）とは「神の教えを守り，それを実現するために努力する」ことを意味する。テロ組織や戦争の首謀者は，これを意図的に曲解し，利用しているだけと言える。ウンマ（イスラム共同体）を守るために「異教徒と戦う」という意味には，暴力を完全には否定していない側面もある。

[イスラム教]（青土社）

イスラム教徒に言わせると，イスラムより前に人間にもたらされた啓示は堕落しており，神の託宣は人間の考えや言葉が混入し，無知の故に男も女も神の教えに従うのを怠ったものである，という。（本論でのイスラム史に関する部分の記事は，主にこの著を参考とした）

[イスラム教徒への99の大疑問]（プレジデント社）

（前掲に類似した内容はできるだけ省略）

第一章　1. 讃えあれアッラー，万世の主。　2. イスラム社会では子供たちは原則無料の塾で，4歳くらいからコーランを学びます。　3. イスラム教は神の「教え」でなく明確な命令です。その命令を曲げられないため戦争が起きます。　4. イスラム国で頻発している戦争の一番の原因は，地下資源の争奪戦という要因が絡んでいます。　5. 中東地区の紛争の原因は，アメリカの石油会社や軍需産業が利益を上げるため，紛争の火をつける事が多い。　14. イスラム国家には「近代法」の他に，シャリーア（イスラム法）があって，これには名誉の殺人が許されています。（イスラム法が優先）17. イスラム世界は見事なまでの格差社会です。（経済的平等とは全く異った現実）

第二章　22. イスラム世界では神の前の平等であり，人種差別がありません。　24. ユダヤ教・キリスト教の一神教が相手なら結婚できますが，一度イスラム教徒になると「棄教」は許されません。（強い閉鎖性を所有）　27. イスラム教徒は聖戦（ジハード）で死ねば天国へ行けるという強い信仰心があります。　37. 教義に忠実な本来のイスラム原理主義者と，政治的背景を持ったポリティカル・イスラムがいます。

第三章　45. 日本には20万人余りのイスラム教徒が住んでいます。

第四章　63. 中東諸国の大富豪たちに流行っているのは，ISなどイスラム原理主義団体への寄付です。

第六章　86. イスラム国（IS）とは，タリバンやアルカーイダと同様にアメリカが中東戦略のための戦闘集団としてサポートした組織で，それがいつしか「鬼っ子」となってしまったのです。

89.ISのリーダー，バグダーディにさしたるカリスマ性があるとは思えません。数か月ISに居て自国にUターンする連中も少くない。　93.ISを支持する組織はアフリカ・中東・コーカサス・東南アジアに広がっています。　98. アルカーイダは，ターゲットをインドに向け，その先新疆ウイグル自治区との絡みで「中国」という真のターゲットが控えています。

[イスラーム，生と死と聖戦]（集英社）

小ジハードは「イスラームの大義のための異教徒との戦争であり，あくまでも武力による戦闘のことです」，「ジハードは天国への一番の近道です。これは普通のイスラームの教義です」，「二度の世界大戦は政教分離がなされた西欧列強によって引き起こされました。ユダヤ人虐殺，ソ連の大粛清――」。キリストやブッダは，その典籍が死後弟子によって書かれたもので，ムハンマドが最も生前の記録を直接伝えている。従ってイスラムこそ最も信ずべき宗教であると。読み進むにつれて，今日我われが客観的で公正だと考える事から序々にづれて行く思いがした。この著書の作者が一北大生をISに紹介したとして新聞・テレビで話題となったムスリム（中田氏）であることを知った。当書の後部にはこの件について，釈明弁解が長ながと述べられている。巻末に，「解説」としてイスラム研究者池内恵氏の説明が付くが，むしろこの方が良識的で公正だと判断された。中田氏の文章へは，読み方に依る危険の指摘もあった。彼は完全なイスラム教徒であり，こうなってしまうものかな，と筆者は考えた。勿論肯定できる記事も多々あるが，こういう思いをしたのは，長い読書経験を通じても，私（筆者）には初めてのことであった。本論では，これ以上の言及は差し控えておきたい。

[無差別テロの脅威]（光人社）

宗教テロが括発化することは，テロ行為がより残酷化しかねない。テロを行なう者はいわば狂信者であり，自ら信ずるものを認めない者たちを抹殺することにためらいを感じないからである。(p.42-43)

[「見えない戦争」完全図解]（KKベストセラーズ）

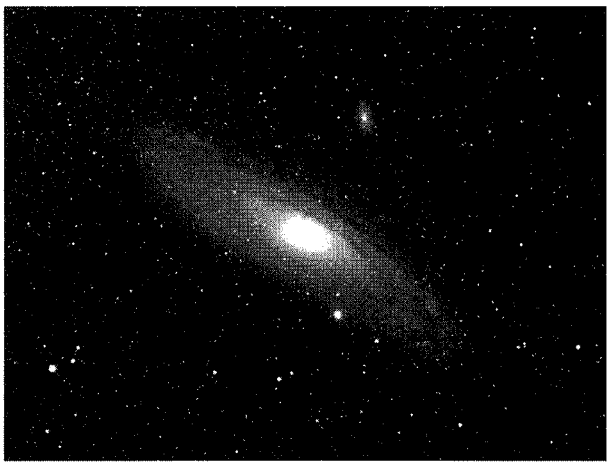
イスラエル（ユダヤ教）とシリア（イスラム）の国境シリア側に所在するゴラン高原に，日本の陸上自衛隊が1996年以降「国連兵力引き離し監視隊（UNDOF)」として，オーストリア・カナダ・ポーランドの各軍と共に停戦監視に当たっている。(P.80)

(5)　考察と結び

以上にイスラムの成立，歴史，教義や特質について探察してきたが，生活様式や儀礼には触れず，イスラム教の全容を論述したものとは言えない。だがこれでも可成り，その本質の実相が知れたのではないかと考える。それで，なぜイスラムにテロが生ずるのかという疑問に関して，最後に，私は次のようなことを記しておこうと思う。

1. 21世紀に入った現代の天文学・素粒子物理学の観点から，西暦七世紀の初めとは言え，天の神がイスラム語を用いてムハンマドに語りかけてきたという話は，現実には有り得ないことだと言える。宇宙は無の状態からビッグバンに依って始まり，先ず重力が分離して超統一が，次に「強い

力」の分離で大統一が崩壊し，この 2 回の相転移でクオークとレプトンが生じた。続いて電弱力の分離による 3 回めの相転移で荷電レプトンとニュートリノが分化したとされる。従って力の統一が分離して現在では，電弱力，弱い力，強い力，重力と 4 つの力が認定されている。この「大統一理論は宇宙論と奥深い所でつながっているので，どんな困難があっても放棄する事は許されない」。(5) これに絡んで，当然アインシュタインの宇宙方程式（$E = mc^2$）も成立してくる。即ちこれで宇宙が発展し，太陽と地球も生成され，やがて地球には植物と動物が生じて進化してきたと考えられる。途中，不確定性原理を経て現在の物理学が通用する世界に至ったと見ても，現世界のどこに，ムハンマドのいう神が実在するのか，実際には想像もできない。人類が亡びるまで探求しても，イスラム語を話す神の実体を発見するのは不可能だと言えるだろう。



M31アンドロメダ大銀河

この天空にはアラビア語を話す神の実体がある、とイスラムでは教える。写真は地球・銀河系に最も近いアンドロメダ星雲の美しい姿。
２０１５年夏、千葉天体写真協会提供。

科学・技術の進歩は，当然人間思想の発展にも相関するものである。これを思想の観点で見ると，4 世紀キリスト教神父アウグスティヌスによって神が正式に哲学の対象とされ，ギリシァの哲学理論を用いて本格的に西洋哲学が始まった。ルネサンスを経てデカルト，ライプニッツの近代哲学を迎え，カントの「実践理性批判」に於て神に**最高善**（das Hohiste Gut）が要請され，ニーチェによって「神は死んだ」と言われて，現世は善神だけが治めるという考えは否定された，とも言える。その後は現代の哲学で神の実在を検証する試みは無くなっている。但しこれは，キリスト教世界の西洋哲学の事であった。しかし，現代の医科学では，人間の精神現象としてムハンマドに類似した経験は，決して珍しくはない事だと知られている。筆者も間接的に，そういう（幻覚）体験の話は聞いたことがある。アーノルドが 19 世紀末に，イスラムを作られた宗教だと述べたのも，決して間違いではない。その証拠に，イスラムは聖書外典を利用したという説が有力である。ここで敢えて私見を述べれば，「神とは（個人の）人間精神の究極的依り所」であり，これが形象化し，広く一般に承認され社会化されて宗教という形をとったものだ，と考えられる。

2. 第二の問題は，イスラムは自らの神を唯一絶対の存在とみなし，カオルーン（コーラン）に

もある通り，この神を崇めて他者を認めず，攻撃されたら武力を以て応じ，且つ教えを広めよ，としている点である。神の教えを守り**ジハード**して犠牲になった者は，極楽に行けると主張している。これでイスラムの攻撃性は，政治性から派生してくると言ってもよい。政教分離とは全く反対の，政治と宗教の一帯性の主張である。当然他宗教に対して容易に敵対的戦闘性を帯びても不思議ではない。一方キリストやブッダの教えは根本的に人間の救いが本質であって，他者に強要することも戦うことも求めてはいない。自分が神だなどとは間違っても教えていない。これが**普遍性**と言うものであろう。（日本の高天原・天孫降臨・万世一系の神――天皇，文化との対比も思いやられる）

またイスラムの絶対性は他宗教，他文明の排除だけでなく，自らに批判を許さず，永い歴史的経過の中で思想ばかりか，科学技術の自由な発展をも阻害する結果を招いたのではないか？キリスト教文化圏に遅れたのは，地理的原因だけに依るものではないだろう。即ち文明の真の発展の閑却である。イスラム生誕の西暦七世紀初から既に1400年以上たって，その伝播した地域は中東からアフリカ，東南アジアやチベットに及ぶが，今第一級国と呼べる国家はないし，代表国たるトルコでは，EU加盟を望み，政教分離を憲法に掲げているともいう。むしろイスラム系国家では独裁制や内戦が多く，安定していない現状にある。ISに至っては，住民への恐怖，難民多発，世界的文化遺産の破壊という情報が我われを含め，世界に広まっている。これが過激化すれば，当然内戦やテロ発生の要因となってくるだろう。

3. 私たちの街でも時どき，スカーフをかぶった若い異国人女性を見かけるようになった。フランスでは禁止されたと言われるが，他国に住んでも，身についた習慣は仲々直らないものだろうし，アラビアには一夫多妻の風習もあって，有力者は4人まで妻を持ってよいとされる。かっての日本では，天皇や将軍には複数の女性が正式にかしづいていた。スカルノ・デビ（第三）夫人など夫の死後，日本芸能界で有名人として活動している人も居る。しかし一夫多妻の生活の中で，本当に人間個人の人権思想などが育つものであろうか。イスラムの国家では小供の幼い頃（4歳）から，カオルーンを教え込むという。特に幼少時に獲得した強い記憶や習性は，頭脳生理上非常に消去が難かしい。近年，多くのパゴダで知られる仏教国ミャンマーで，海岸地方にいつの間にか住みついた多勢のロヒンギャ族（イスラム）を，国会決議で国外に退去させた（受け入れ国と1か年契約）という報道もあったが，アメリカ大統領選挙での共和党不動産王候補トランプ氏のイスラム排斥発言など，積極的な動きも目立っている。ましてや数百万人に及ぶイスラム系避難民がヨーロッパ諸国へ流れ込むという現象に，受け入れ国民の気持ちも思いやられよう。今回のイギリスEU離脱の有力な一因にもなっている。その上テロは2001年9.11のアメリカやロンドンでの列車事件，近来16年のパリだけでなく，イスラム国家のトルコ，それにジャカルタでさえ起きている現実がある。テロ集団はIS，タリバン，アルカーイダの他にも複数ある事が知られている。『文明の衝突論』の著者故サミュエル・ハンチントン教授のイスラム人口増大への警告にも，我われは無関心ではいられまい。未来へ向かい，誰もが相互に人間として知恵を絞り，賢明に対処して行かねばならない運命を担っている自覚が必要である。最後に一つ，ジハードで死んだ者は極楽園に行けるという信心は，たといカオルーンに在っても，大きな過ちの原因になる，と筆者は強く考えている。

3

前論「――日本統治機構の特質と矛盾Ⅱ」では，先の第二次大戦敗戦までは‘不敬’として禁じられ，事実上全く不可能だった日本天皇制成立の研究探察を，戦後の学者研鑽の成果として慎んで引用させていただいた。記述は古代末の武士団の発生までであったが，藤原不比等の意図した「高天原・天孫降臨・万世一系」という本筋がその後の歴史にどう係わって来たのか，この検討を欠いて現在の情況を解釈批判するのでは充全とは言えまい。それでこれを文化・社会事情の流れと併せ，制限枚数の中で重点のみ，経過情況を簡潔に記してゆこう。

(1) 日本の中世

関白藤原頼通の娘に皇子が生れず，摂政・関白を外戚としない後三条天皇が即位し，1069年延久の荘園整理令を出して，荘園を公領制に改めた。その子白河天皇は1086年に幼少の堀河天皇に譲位して，政治の実権を握る院政の道を開いた。地方では各地の武士が館（たち）を築き，特に陸奥では平泉を根拠地として，奥州藤原氏が3代にわたって繁栄している。

1156年崇徳天皇は，皇位継承を巡って対立する後白河天皇側の平清盛と源義朝らの武士団に破れ，讃岐（さぬき）へ流された（保元の乱）。後白河は上皇となり，院政するうち近臣の対立から平治の乱が起きる。貴族社会での争いも武士の力で解決される事が知られ，乱後平清盛は後白河上皇を支えて昇進，平氏政権となる。清盛は繁栄を極めたが，院や貴族・源氏から反発を招き，没落を早める結果となった。

源平争乱　平清盛が後白河法皇を幽閉，安徳天皇を位につけた（1180）ことに端を発し，武士団・貴族・大寺院に不満が高じた。源頼政が挙兵し，源頼朝や義仲も挙兵して争乱を起こす。1185年長門壇の浦で平氏は滅亡し，これから地方武士団が支配権を拡大，特に頼朝は鎌倉に武家政権としての幕府を樹立する。頼朝は弟で争乱の功労者義経を，かくまった奥州藤原氏共ども滅ぼした。朝廷からは征夷大将軍を任じられ，以後鎌倉時代となる。頼朝の死後は御家人中心の政治となり，北条氏が実権を握る。朝廷では後鳥羽上皇が政治の立て直しを計り将軍実朝と連携したが，実朝は頼家の子公暁（くぎょう）に暗殺された。上皇側は北条義時追討の兵をあげた所，頼朝の妻北条政子の呼びかけで大多数の東国武士が結集し，京都を攻めて圧勝した。その結果3上皇が配流された。これが承久の乱である。幕府は皇位継承に介入し，六波羅探題で朝廷監視，京都内外の警備を行い，独裁的執権政治となる。

蒙古襲来（元寇）とその後　13世紀モンゴルは諸民族を統合して一大帝国を建設，フビライが国名を元と定めて，日本に朝貢を強要した。執権北条時宗はこれを拒否，1274年に文永の役が戦われた。のち1281年には14万の大軍が来襲して弘安の役を迎える。この時蒙古軍は日本側の奮闘と台風の被害に会い大敗した。しかしその後幕府は御家人へ恩賞を与えきれず，社会・経済の変動を受けて衰退した。社会には念仏を唱える鎌倉仏教が開かれ，「新古今和歌集」・「平家物語」など

中世文学が花開いた。

後嵯峨法皇の後，後深草上皇の流れをくむ持明院統と，亀山天皇の流れの大覚寺統が対立，皇位継承や院政権，天皇領荘園相続を巡って争い，鎌倉幕府が調停して両統交代の両統迭立(てつりつ)を取る事とした。しかし後醍醐天皇（大覚寺統）が親政権限の強化を図ったことから，北条幕府側の不満と迭立支持に対して天皇側は再度挙兵を目論んだ。これが失敗し，後醍醐天皇は隠岐に流される。その皇子護良親王や楠木正成らは粘り強く戦い，天皇は流し脱出に成功した。幕府の有力家人足利尊氏や新田義貞は北条高時を滅ぼし，鎌倉幕府は消滅した（1333)。後醍醐天皇は京都に帰り，建武の親政を進める。

その後，足利尊氏は持明院統の光明天皇を立てた。後醍醐は京都から吉野の山中に逃れ，皇位の正統を主張した（南朝)。これに京都の光明天皇側（北朝）が対立し，南北朝動乱を迎えた。引き続いて尊氏派（幕府）と旧足利直義派･南朝勢力の三者が，10年余離合集散を繰り返した。この後，嫡子相続，血縁でない地縁的結合が一段的となる。

室町幕府と文化　南北朝の動乱後，尊氏の孫足利義満は1392年，交渉して南北朝の合体を実現した（室町幕府)。1429年に琉球王国成立，14世紀には蝦夷ヶ島へ日本人進出。1467年幕府内実権争いで応仁の乱，1485年山城の国一揆，1488年加賀の一向一揆などの事件を経て，この時代に農業だけでなく商工業も発達した。

文化面では金閣・銀閣が作られ，雪舟絵画，庶民の文芸が流行する。北条早雲・上杉謙信・武田信玄・毛利元就ら戦国大名が登場し，城下町が建設された。商工業者で成る町衆から町ができ，祇園祭など月行事も生まれた。

(2)　**近世Ⅰ**

織豊政権　ヨーロッパはスペインとポルトガルによって，大航海時代に入っていた。日本では南蛮貿易が始まり，フランシスコザビエルらからキリスト教が入る。織田信長が全国統一に向かい，足利義昭を倒して室町幕府は滅亡した。安土城構築後，本能寺の変で信長は去る。豊臣秀吉が全国統一を実現。秀吉は天皇を巧みに利用し，検地と刀狩りを実施し，朝鮮出兵（侵略）も実施した。当時桃山文化が開花し，活字印刷術も朝鮮から伝えられて，町民生活は向上，歌舞伎も行われ，南蛮文化も進展した。1600年には関が原の戦いで徳川家康が勝利し，将軍職を世襲とする。これ以後，日本社会は幕藩体制となった。

幕府と朝廷　「徳川家康は1611年，後水尾天皇擁立の際，天皇の譲位・即位を武家の意向に従わせる権力を示し，1613年公家衆法度，15年禁中並公家諸法度を制定し，朝廷運営基準を明示した。幕府は京都所司代らに朝廷を監視させ，摂家（関白・三公）に朝廷統制の主導権を与え，武家伝奏を通じて操作した。[(6)]」幕府は天皇・朝廷が権力をふるったり，他大名に利用されないよう，天皇や公家の生活・行動を規制する体制とする。他にも禁教令を出し，キリスト教信者に厳しい迫害を与えた。[(7)] 1637年島原の乱が起き，41年以降は長崎を除いて鎖国状態とする。但し家康は朝鮮と講和を実現し，前後12回の使節が来日した。琉球王国は1609年薩摩の島津家久に征服され，8万

9 千石の王位につかせた。また蝦夷ヶ島の和人地では蠣崎（かきざき）氏が松前と改称し，アイヌ集団との交易を続けた。江戸時代寛永期の代表的建築には桂離宮書院がある。この頃社会に身分の制度ができ，百姓・職人・家持町人（商人）の他「非人」も現われ，今に言う「士農工商」の形が出来上った。

※　※

昨今，世界の各地で IS などイスラム過激派のテロが頻発しているが，今回の検討でその原因の大筋は理解できたと考える。宗教への狂信というのは恐ろしいことである。また本論第 3 章で扱った徳川時代初期には，藤原不比等が大いなる利己的野心で創った世襲天皇制皇統が神を装った事で，既に強固な既得権として日本社会に定着していた事実を証していると言える。次回には徳川期から現代までの史的流れを見て，日本社会の身分構造の分析を試み，特権階層のためでない庶民の存在を生かした社会について，考察してみたい。

折しもイギリスの EU 離脱，アメリカ資本主義の行き詰まりとトランプ現象，中国の東・南シナ海進出が世界の話題となっているが，イスラムテロばかりでなく，日本自体の事実上の自民党一党独裁政治の継続など，誠に世界には問題が多い。今人類は大きな変動の転換期に差し掛かっているのであろうか。

［註］

（1）Matthew Arnold;"*God and the Bible*". the Complete Prose Works of M. A. Ⅶ. Edited by R.H.Super, Ann Arbor, the Univ. of Michigan Press. p.12, *l*.1.
（2）Ibid., p.35, *l*.32.
（3）Ibid., p.39, *l*.21.
（4）*Cf*. Ibid., Critical and Explanatory Notes. p.404.
（5）『ヒッグス粒子とはなにか』，ハインツ・ホライス，矢沢潔。ソフトバンク クリエイティブ KK. p.188.*l*.14.
（6）『山川詳説日本史』，山川出版。p.174.
（7）戦国時代ポルトガル商人に売り飛ばされた多くの日本人女性がいた。宣教師がこれに関わっている事で，秀吉が宣教師追放令を出した。これが一因ともなった。『世界史で学べ！地政学』。茂木誠，祥伝社．p.280.

July 10. 2016 完成

(2016 年 9 月 28 日受理)